

---

# **ご注文は？～魔法使いで！～**

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「注文は？～魔法使いで～」

### 【Zコード】

Z5817B

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

機械を愛する少年、零時はファミレスで不幸にも一般人ではなくなってしまう！

(漫遊)

少々、歌こと思こせぬ。世間があぬじせばよひへたらうこと  
思こせぬ。

一、  
俺の名前は剣山 零時。つるぎやま れいじ 近頃高校一年生になつた自分では平凡な  
高校生と思つてゐる平和な心の持ち主だ。そんな俺は、友達である、  
後鳥河 瑞樹ごとりがわ みづきと共にちょっと遠出をして、ちょっと高そうなレスト  
ランに入った。

「・・・おい、俺はそこまで金ないぞ？」

「大丈夫。貧乏な人にもこここのレストランは優しいのだよ、零時君。  
ほら、貧乏人の君にはこのケーキセットがお勧めだね？」

「けつ、坊ちゃんのお前はいいよな・・・」

「いや、小遣いを無駄遣いするのが間違いじゃないのか？」

瑞樹は俺に真剣そうに言つてくる。ふん、俺は無駄遣いをしてい  
るとはこれっぽっちも思つちゃいない。どちらかといつと美少女関  
係の人形に金を使つてゐるお前のほうが無駄遣いしてると思つぞ。  
うん、機械は人間を裏切らんだろう。

「へえ、でも可愛い女の子なんか興味ないの？趣味は？」

「趣味は機械関係だ。興奮するときは見たことも無いロボットなん  
かの断面図を眺めたときだな。」

「・・・なら、ロボットの女の子とかなら興味あるの？」

それは・・・まあ、ロボットだからな。女の子だが、ロボットだ。  
いや、なに、俺だって興味が無いといえば嘘になるが、やつぱり、  
ロボット♪女の子という具合だ。あー、それなら道端にロボットの  
女の子とか落ちてないかな?

俺がそんなことを考えていると、近くをウェイトレスが通つてい  
つた。その服装を見て俺の馬鹿な友達はにやにやしている。

「どう? 可愛いと思わない? ぐつと来ない?」

「さあね? 俺はドラ もんがウェイトレスしてくれたほうがいいね。」

「

「わかんないやつだなあ。」

はあ、俺は何でこんな奴と知り合つてしまつたのだろうか? いや、  
根本的に家が隣だからか? まあ、こんな性格している割には結構も  
てるんだがな。俺ももてたいものだ、ロボットに・・・。

「全く、お前もこんなレストランに男と来ないで彼女と來たらどう  
だ?」

「いやいや、彼女なんかつくつたら面倒なだけだね。自由にいろん  
な事できなーいし、時間だつて無くなる。勿論、可愛いと思う女の子  
もそり、現実にも居るけどね・・・ほら、あんな子とかいいよねえ。」

「

夢見る乙女のような感じで殺人の眼差しを送る先には気の強そ  
なウェイトレスが注文を聞いていた。まあ、可愛いといえば可愛い  
んだろうな。だが、俺としてはあれよりも・・・

「俺はあつちの物静かなほうがいいな。ロボットっぽいし・・・。」

俺の見る先には銀髪の外国人らしき女の子が注文をとっていた。

「そりか？僕はやつぱりあつちだなあ。あ、そんなことより・・・。」

「

そう、俺のこれからが変わったのはこいつが話を変えて話し始めたことがきっかけだったのだろう。俺はその結果、平凡というなんとも得がたいものを捨てなくてはいけなくなつたのだ。

「・・・実はさ、このレストランは表じゃ普通なんだけど、ある事をするとね、裏のレストランに連れ込まれた挙句にそのある事をした人間をね・・・。」

「ロボットにでも改造するつてか？は、そんなことだつたらいいねえ。受けてみたいよ。」

馬鹿らしくて聞いてられなくなつた俺は立ち上がつた。

「お~い、まだ話は終わつてないぞ！」

「あ~わかつてるつて、お前の話をきちんと聞くために今からトイレに行くんだよ。その間にお前は好きなウェイトレスでも呼んで注文でもしてろよ。」

俺はそういうつて先程から我慢していた尿意をなくすためにトイレに向かつたのであつた。

長い付き合いだから分かるが、あいつの話は本当に長い。一度、話を聞き始めたら絶対には立つてはいけないという雰囲気が出来上がり

り、トイレに行こうと思つてもなかなかそうはさせてくれない。まあ、話すことはどうでもよきもとなんだが、色々と世話になつていたりもするのでそこはきちんと聞いておかないと失礼だと俺は思つてゐるわけだ。

「あー、出た出た。」

そんなことを俺は呟きながら瑞樹がいるテーブルへと歩いていくうとしたのだが・・・。

「きやつ！－！」

俺の右足の進行方向に一人のウェイトレスが水をこぼしゃがつた。あの気の強そうなウェイトレスだ。そして、俺はそのこぼした水に思いつき足を踏み入れ・・・・こけた。

「うわっ！－！」

それだけならまだいいだろ。俺はそのまま何か掘むものはないかと思って水をこぼした相手の衣服の一つを思いつき掘んだのだ。ま、当然の事だと思って欲しいね。誰だつて頼りたいものさ・・・・。

「きやああ！－！」

まあ、当然のように俺の全体重を支えることが出来なかつたその衣服は破れた。それが、スカートだと気がついたのは俺が何とか立ち上がつたときであつた。

「零時、グッドだ！－！」

スカートが取れた女の子へとみんなの視線は当然のように注がれている。俺は慌てて手に持っていたものをそこの机へ頬り投げたのだが・・・。

「・・・お客様、ちょっと来てください。」

店長らしき男が出てきて、

「え・・・な、ちょ・・・。」

しりもちをついていた俺をあっさりと抱えあげて店の奥へと連れて行つたのであった。

「零時！お前は最高の友達だあ！！」

と、後ろからは瑞樹の感極まつた声だけが追いかけている。

「・・・このレストランの噂を知っていますか？」

「え・・・？」

抱えられたまま唐突にそんな話をしてきた。まあ、その話は瑞樹から聞くこととなつていたのだが・・・。

「知りませんが？」

「そうですか、残念でしたね・・・知つていれば故意にスカートをズリ下げようとはしないでしょうにね。」

それは間違いだ。俺はズリ下げるたくてズリ下げるんじゃない。勿論、あの馬鹿のために下げるやつたわけではないぞ！－あのウエイトレスが水をこぼしやがったんだ！－俺のせいじゃない－！と、そんなことを思つていたのだが、急に話せなくなつてきた。まぶたが重くなつてきたのだ。

「なあに、直済みますよ・・・・貴方は榮えある、第一号のお仕置きされる人です。それでは、良い夢を・・・・」

そして俺は意識を失つたのであつた。いやあ、参つたね・・・まさかレストランの店長に誘拐まがいの事をされそそうになるなんてね。

「・・・・え・・・・

「つま・・・・が・・・・い・・・・」

「誰だらうか？誰かが話をしている。

「・・・・ん？」

俺は目を覚まして辺りを見渡した。自転車かと思つたが、どうやらここはどつちらりあのレストランの中のようだ。料理の匂いなんかが漂つてきてる。

「あ、目を覚ましたよ、店長。」

「そ、そりかね？」

俺は目を覚まして驚いたね・・・何故かって？そりや、誰だつて吹く何も來てない状態で目が覚めたら驚くだらうね。いや、まあ・・・

・白い布が俺の体にかかっているからいいだろうがね。

「いや、零時君だったかな？ 田覚めはどうつかね？」

なにやらまつた悪そうな顔で俺を抱えていた店長じき男は、俺を心配そうに見ている。はて、何かされたのか？ や、されたのは間違いないが、何をされたんだ？

「あの、俺なんで裸なんですか？」

そのことを尋ねると、辺りに居るスタッフなんかは凄く申し訳ない顔をして俺を見ている。なんだ、マジで俺はロボットにでもなったのか？

「零時君、落ち着いて聞いて欲しいんだ・・・。君はこのレストランの噂を聞いていないといったよね？」

「ええ、知りませんが？ まあ、友人から聞いたとしたところだったんですけど・・・。」

「どうかと呴いて店長さんはため息をついた。なんだ、この葬式みたいな感じの雰囲気は？」

「実はな、このレストランには捷というものがあつてウエイトレスのためにあるんだが・・・まあ、それが簡単に言つとウェイトレスにちよつかいを出したものは問答無用でこのレストランの地下にあるある特殊な大鍋の中に放り込まれるんだ。」

「って、なんじゃそりやあ！ ……どうせそんなことをやるならロボットのほうがまだましじゃねえか！ ……」

「ほ、放り込まれたらどうなるんですか？」

俺は恐る恐る尋ねてみた。俺が生きているとこいつとは鍋に放り込まれる前か、鍋に放り込まれた後である。後なら、放り込まれて死ぬことは無いだろうが・・・時間差でくたばるかもしかんな。

「・・・魔法使いになつて、罪を償つてもうつことになるんだ。お、おい！！大丈夫か、零時君！！誰か、きゅ、救急車を呼んでくれ！！」

俺は目を覚ました。どうやら今度は病院に居るらしい・・・は、魔法使いだつてよ、ありえないね。それならまだ、一足歩行のロボットが銃持つてビンゴばかりやつてる丑しつが現実性があるね全く。

「はあ～。」

「ちよっと・・・。」

俺のベッドの近くにはあのウエイトレスが居た。なんとも居心地の悪そうな顔でパイプ椅子に座つて俺の顔を見つめている。全く、このウェイトレスのジジのせいで俺の人生は変わったのか？嘘だと思いたいところだ。だが、このウェイトレスがいるといつ」とは、間違いないんだろうなあ。

「・・・あんた、何でこんなところに面会室なんだ？」

「・・・え、いやだつて・・・その、店長が傍にいるだつて。何か聞きたいことがあつたら困るだらうからって・・・。」

「ええ、本当に俺は魔法使いになつたのか？」

「本當に俺は魔法使いになつたのか？」

「ええ、本當よ。あの鍋の中に入つた人間はまずまちがいなく、凡人じやなくなるわ。元から魔法を仕える一族とは違つてね。」

なにやら考へたようで、俺に更に言つてきた。

「でも魔法仕えたほうがいいでしょ？ね、いいよね？ちょっと使い方を覚えれば簡単だし、私が住み込みで貴方に魔法を教えてあげるからさ！！」

「どうやら、この感じはまちがいなく、あれだ・・・。自分の失敗をもみ消そとがんばっている。だが、残念だつたな・・・。」

「残念だが、俺は凡人のほうが良かつた。そんな特別で使い方がめんどつちい、魔法よりも、単純にガンムを操作したい。それに、俺はあんたよりもどつちかといつとドラもんに来て欲しいもんだ。」

「そ、そんな・・・」

「残念だが、俺は別にあんたの力は必要ない。魔法なんかいらないから、凡人に戻してくれ。あ、そだ・・・電話を貸してくれよ、電話して店長にどうやって凡人に戻れるか聞くからさ・・・。」

「そういうてみたが、今は私服のウェイトレスは俯いたまま、黙つたままだ。

「お～い、どうした？」

「…………りなの……。」

「は？」

「だから、それは無理だつて言つてるのーー！」

んな、怒つた口調で言わんでも・・・・・なにも怒られるような  
こといつてないし・・・。

「それはどういう意味だ？」

「残念ながら、あのレストランはもう無いわ。店長は既に逃げてしま  
るし、店の何人かの魔法使いも一緒に居なくなってる。ほかのスタッ  
フは記憶を一部分だけ消されて、そのまま働いてるけど・・・。」

「な、なぜじやあーー！」

「それが、魔法を使つてる者の撻なのーー失態を犯したのが弟子だ  
つたら、その師匠も同じような償いをしないといけないし、今頃一  
族の何処かで下請けでもやつてると思うわ。」

「じゃ、俺はどうなるの？..」

「そこは・・・大丈夫よ、私が何とかして貴方をサポートするから  
さーー！」

「じゃ、凡人には戻れないの？」

「・・・残念ながら・・・でも大丈夫だつて！私は何とかしてみるからーーー！」

「あ、なるほど・・・俺の凡人としての生活は終わりを告げたようだな。

何か悪いことしたのか、俺？これまでの生活だつて人様には迷惑を掛けられたことはあつたが、迷惑を掛けたことはなかつたぞ？小さい頃はガンムのプラモの代わりにネジを眺めて我慢してたし、苦手な体育もこれまでがんばつてきたっていうのに！–それともなにか、前向きに考えたらこれは神様からのプレゼントか？他人には無い、特殊な能力と綺麗な女の子がプレゼントされたのか？ちょっとまでい！–それなら、それならせめて・・の太のよう！ドラもんを送つてくれよーーー！」

「・・・。」

「ほ、ほら・・・ね？私、貴方の努力に答えるからさ？」

いや、そりゃあ、世の中嬉しいつて奴も居るだろうぞ？だけどさ、せめて・・せめて・・俺はロボットの女の子が着て欲しかったな。ふ、無駄なことだつて思つてるさ。神様、俺が神様になつたらロボットを量産して魔法使いを根絶やしにしてやるぜ・・・・ま、復讐するにむどうするにも、俺はどうやら、魔法という教科を新たに勉強せにやならんのか？やつぱり、ロボットのまづが良かつたなあ。

「と、とりあえず・・・貴方の家に案内してくれない？」

「・・・は、わかったよ。で、住み込みつて言つたつて、どうやつ

て俺の家に住むんだ？俺は仕方ないとして、俺の家族が何か文句を言つかも知れんぞ？」

俺がそういうと、そのウェイトレスは胸を叩いた。まあ、胸もあるほうなんじやない？

「そここのところは大丈夫よ。店長・・・まあ、私の師匠が貴方の家族の記憶をちょこつとだけ書き換えたからね。」

はは、なんかとっても面白くない展開になつてそうだな。こりや、急いで家に帰つたほうがよさそうだ。

そして俺は家に帰りついた。扉を開けていつものように入る。後ろからはウェイトレスが俺と同じようにして入ってきた。

「零時、大丈夫だった？」

出てきたのは俺の母親。く、やつぱりウェイトレスを見ても何も言つてない・・・。

「いや、まあ・・・。」「

そして俺は自分が何で病院に入つていたのかを知らない。いや、倒れたのは覚えてるんだが、家族にはなんていわれているんだろうか？まさか、本当の事を言つてしまつたとは思えないが・・・ま、こりはやつぱりウェイトレスに聞いたほうがいいだろ？

「・・・ちゅつと、俺の事はなんて家族に言つたんだ？」

「え・・・そ、それは・・・。」「

俺たちが話していると母親が田代とへ見つけたらし。

「あー、やつぱりその子が大事なのねえ？いつも彼女なんかいらな  
いって言つてたあんたがこんな可愛い子連れてくるなんて母さん、  
嬉しいわ。不良に囲まれていたところを助けるなんて、意外と見所  
あるじゃない？」

「は・・・？」

おやおや、そんなことになつてたんですか・・・。俺は物言いた  
げな視線を隣のウーハイトレスに送るが、無視された。

「じゃ、お母様・・・零時君とお話があるんで、上に上がつてます  
ね？」

「ええ、息子をよろしくお願ひするわね？」

俺はウーハイトレスに引っ張られるようにして浴室に入ったのであ  
つた。一応、鍵を掛けておいた。

「なあ、何でお前が俺の彼女になつてるんだ？」

「そ、そんなことはどうでもいいじゃなーーー私みたいな可愛い子  
が彼女になつてるんだから構わないでしょ？」

いや、俺は彼女にするならジラ チャンのほうがいいね。

「まあ、あんたが自分の事を可愛いと思うのなら思つていればいい。  
で、これから俺はどうすればいいんだ？あんたが魔法を俺に教えて  
くればそれで終わりなんだろう？」

簡単に考えていた俺が間違いだつたかもしれないな。俺の質問にウェイトレスは反抗するよつとして答えた。

「確かにそうだけど、そつ簡単には終わらないわよー魔法を甘く見てるんじゃないのか？」

「じゃ、じゃあ・・・俺はずつとあんたと居ないといけないのか！今日だけとか明日だけとか、一週間後とか・・・そんな短い期間で終わらないのか！」

「あ・・・そつなるわね。」

「い、いやじやああーーいやじやああーーそんないやじやああーーあーー！」

「ま、運命だと諂つて諦めて・・・私だつて、男の部屋に住まないといけないんだからや。」

俺はウェイトレスを掴んで、持ち上げ、階段下りて、玄関から放り出した。全く、普段からこんなに力が強いのなら、もつと違う性格になつてたかも知れんな。

「うつちも結構だーー大体、運命つてなあ・・・お前が水こぼしたのが悪いんだうつーーぶつかけ俺はあんたの事を目障りで仕方ないと思つてるーーじゃあな、あの店長に言つてくれ。『不必要です、運命だと諂つてしまひります』ってねーー！」

俺はそうじつてあひらさんが何かを言つてくる前に玄関を閉めた。そしていつものように階へと上がつて自室にひもつてネジを眺め

る。

「……これも運命だ。一人のほうがなんとかなるだらうよ。」

さて、これでせいぜいしたつてもんだ。全く、被害者はどう考えたって俺のほうだらうよ・・・店長さんも全く、何であんな小娘を俺のところにやつたんだ?魔法でこの際、ロボットでも召喚してくれれば良かったのに・・・くそ、腹立つなあ。

そんなことを考えていたら扉をノックするような音が聞こえる。

「零時、貴方の彼女が玄関先で泣いてるけど・・・?女の子は守らなきや。」

へ、俺が守るのはロボットと、両親が決めた門限ぐらいだ。守りたい奴が守ればいいじゃねえか。俺は門限を守るのも難しいんだぞ?そんな俺が誰を守るって言つんだ。全く、玄関先で泣くなんて迷惑極まりない。

「・・・はあ、全く・・・門限だつて守れないんだぞ、俺は・・・」

三、

結局俺は母親の言つたことを正しくてあのウーハイトレスを再び家に入れた。

「全く、泣いたら何でも解決できると思つてゐるのか?そういうものは、三歳までと、彼氏の前だけだぞ。赤の他人の家の前で泣くんじやない・・・。」

「ハハハ・・・」

さて、世間の皆様が見たりどうちが悪いって思うかな？どうせ、俺だと答えるだろうよ。はあ、全く……今日はついてないな。

「俺が魔法を全て覚えて使い方を間違えなければいいんだろ？うすれば、お前の師匠であるあの店長の元へお前は帰れるんだな？」

そう聞くと確かに頷いたようだ。はあ、どうやら妥協点は見つかったようだ。つまり、俺がその魔法を全て覚え、使い方を間違えなければ全てはするのだ。迷惑極まりないが、しょうがない。

「泣いてないで早く魔法を教えてくれよ。」

「うう……ぐすっ……わかった。」

全く、気が強いのかと思つたら弱いじゃないか。こりや、瑞樹に人は見た目で判断しちゃいけないって言つたほうがよさそうだな。しかし・・・・

「前々から思つてたんだが、あんた、名前はなんていふんだ？」

「……ひぐつ……名前？」

「ああ、名前だ。きちんとした奴だぞ？」

「・・・セレネ・ルーナ。」

ああ、そつかい・・・しかし、会話が全く弾まないな。そりや、弾むような会話のネタを持つてないし、唯一、話すことができるのは魔法の事ぐらいだろうな。まあ、俺自身がそれを知つたのは初めてだつたし、俺は魔法よりも機械のほうが好きだ。

「なあ、セレネ、魔法つづいていいの？」

「……想いを具現化できる力よ……思つていろ」とを実現しようとするとその力が助けてくれる。まあ、じいじで見せたほうが早いわね……。」

おもむろに立ち上がると右腕を掲げ、俺に言つてきた。

「例えば、暗いから火が欲しいなって思えば……。」

右腕から炎が出てきた。マジック? いや、宴会でひょいといわれると思つわ。」

「ほひ、こんな感じで炎が出せるの。零時もじのへりになら直でわかるとと思つわ。」

「へえ?」

俺は真似して右腕を掲げてみた。結果、凄い量の炎が出てきた。  
「うょ、なにしてるの……急いで消して……。」

「ああ、はいはーー!」

その炎を俺は消した。いや、消さうと思つたら消えの他で別にかまわんだろう? まあ、天井が凄く黒焦げになってしまったのだが……。

「驚いたわね、こんな簡単に出すなんて……。」

「や、そりだな……なんで出たんだ?」

一人して悩んでいたが、今度は安全な方法で翻訳しました。ま  
ず、知識を手に入れると何からはじめるとするか……。

「じゃ、実践は危ないから知識を教えてくれ。何をどうすればいい  
のかとか、違う点での注意とか……。」

何故かあたふたしているセレネ。どうかしたのだろうか?

「ち、知識ね? だけど……私、ちょっと苦手なの。小さい頃から  
練習ばかりでなんとなくしか覚えてないし……。」

おやまあ、近頃の子供もは勉強熱心ではありますね、奥様……。  
つまり、セレネは実践向きのアウトフィールド派つてやつなんだ  
らうな。

「じゃ、基本的にやつちやいけない」とかも知らないのか?」

「それは……わかるわよ。やつちやこけない」と、やつていい  
ことぐらいいの判断ぐらいい簡単よ。」

そういうことなら少しだけ、安心できる。ただ、この魔法つ  
てもんは使える回数が決まっていたり、特定の条件のときしか使え  
ないってのがおちだ。一応、何回ぐらいい使えるのか聞いてみよう。

「なあ、魔法つて何回使えるんだ?」

「何回つてんの? 回数制限なんて無いわよ。だから、使用するとさ

にやつてはいけないとやつていいことが存在するのよ。じゃ、早速教えるわ。まず、やつたらいけないことは……。」

俺は黙つてセレネの話を聞き始めた。その話は意外と長く、母親が何回か俺たちの事を呼んでからようやく話をやめたべらりだ。

「……とまあ、」こんな感じね。今日はこのべりだけど、明日からなきちゃんと教えるからそのつもりでね?」

「へえへえ……。」

そういうて俺たちは1階に降りたのであつた。まあ、先生の話を聞くよりも良かつたが、どうにもこうにも、納得いかないな……。何故俺の部屋でわざわざ教えるんだ?

そして夕食時。俺には一人の兄が居るが、この家には住んでいい。とつぐに自立しており、会つとしても特別な行事のときぐらいである。そして父親はいつも帰ってくる時間帯が遅い。必然的に夕飯は母親と一人で取ることになつていて。

「……けど、『女の子? そんなことよりネジいじつてたほうが楽しい。』といつてたような零時がねえ……彼女作るなんてねえ……。」

「ははは……お、俺だつて女の子が嫌いってわけじゃないよ。」  
本心ではちょっとばかりつるをくべて、面倒な相手と思つてゐるだけだ。

「だけど、本当にセレネちゃんは可愛いわねえ? 聞いた話じや、外国人だつて?」

「え、ええ・・・そうですね。はははは・・・。

実際のところはどうなのが知らないが、いや、俺としてはどうでもいいが、さつやと一緒に上がったほうがよさそうだ。

卷之三

「ねむいがねのせい？」

そのことに対する返事はなかったのである。

L

俺はそういうて白紙の紙を一枚机の中から取り出して絵を書き始めた。まあ、あれだ・・・メカの断面図を書いたりすると頭の中がさえたりするんだ。ちょうど一枚書き終わつたところでセレネが俺の部屋を開ける。

「零時、何書いてるの?」

「ああ？ たんなる落書きだ。別に落書きぐらいしたって構わないだろ？ う？」

「そうだけど…………。」

俺の後ろから覗き込むような感じで俺の手元を見ていたセレネは  
呟いた。

「へえ、見た目と違つてそんな繊細に書けるんだあ？」

「ま、まわね……小さい頃から絵は描いてたほうだし、『うすりや、一人でも構わないしな。暇なときは大体、一人で絵を描いてるぞ?』」

「ところどそ、あたしの事どう思つてる?」

突然、真剣そうな感じの声を出してセレネは俺に尋ねてきた。いや、まあ、はつきり言つて『邪魔』と答えたい。絵を描いているときに話しかけられたりするのは俺がもつとも懸念することだ。しかし……

「まあ、居てもいいな。セレネがいないと色々と大変だらうからな。」

「本当にそう思つてる?」

「ああ……。」

まあ、嘘だとしても俺の絵を褒めたし……ま、まあ……人に褒められたぐらいで有頂天になるつてのもどうかと思うのだが、それはそれだ。

「じゃあさあ、私は貴方にとつて何番目に大事な存在?」

「はあ?」

何故、今日あつたばかりの相手にこんなことを聞くのだろう……。

。 そつだなあ、俺の中でセレネは何番目だ？優先順位つて奴が俺の中には存在しないしなあ・・・

「さあ？とつあえず、居なことまずいとは思つてるわ？」

「・・・。」

ちよつとぞばかり不服そうな顔をしたセレネは俺に右手と左腕を三角にするようにしてその手の隙間から覗き込むような感じで俺を見た。

「・・・どうやら、本当みたいね・・・零時、これからはバンバン鍛えてあげるから、そのつもりでね？」

不適に笑うセレネを見て俺はため息をついたのであつた・・・。なあに、人間、溜息なんてつきまくるさ。そのためいきがちよつと勘弁してくれよといいたそな感じでも、人つてものはがんばらなりといけないものさ。そんながんばる俺に何かをくれ、神様。

「はは・・・がんばってみるよ。」

やこへ、母さんが上がってきた。

「零時、セレネちゃん・・・お風呂沸いたわよ？」

「ああ、そつ・・。先に言つとくが母さん、俺は一人ではいるぞ？」

「あらそつ・一人はとつても仲良しだと思つたけど・・・流石にそこまでは発展してないのね？残念だわ。」

こんなことをいう母親に対しても俺は流石に溜息しか漏れてこなかつたのであつた。まあ、これだけは受け入れたくない運命だな。噂になつたら困る。

#### 四、

その夜は満月だったのでなんとなく部屋の窓から見えていた満月を見ていると風呂からあがつたセレネが俺の隣にやってきた。隣に来ただけだったから黙つていると……。

「何か話したら？せつからく綺麗な女の子が居るってこの辺のこと？」

「へ、自分の事をきれいといつてりや世話ないわな。なあ……いや、なんでもない。それより、魔法の勉強でも教えてくれ。」

「……わかった。」

これまで部屋にはほとんど人が入ったことなんて無かつたのだがな。ま、それはいいとして、さつさと魔法とやらをマスターしてこの小うるさい女には退場してもらつか。

だが、日常とは思つたようないかることを俺は知つていたのだが、まさか、まさか勉強するのにここまで障害が出るとは思わなかつた。それは、今からちょっとだけ先の話だ。

零時、公園に行くわよとセレネにいわれ、俺は付いていったんだが、場所が悪かつたとしか思えない。

「セレーネ……」

「しつ……黙つてて……！」

俺らの視線の先に居るのは闇よりも暗いフードをかぶつた性別不明の謎の人物であった。なにやら、俺たちを見ているようだ。いや、

でもどうやつて？

突如、セレネは腕を掲げ、燃え盛る炎を相手にぶつけた。いや、ぶつけたという表現がぴったりだ。あたつたら、こんがり丸焼けになつていただろう。そう、あたつていたらの話だ。相手はそれをひらりと避けた。後ろにあつた公園の花壇が煙を上げて炎上。まあ、火は直におさまったみたいだから消防車も要らないだろう。

「セレネ、危ないだらうが？」

「あんたは黙つてて……」

更に加速するかのように先ほどとは違つたものをセレネは腕から出した。今度は水だ。夏に当たつたらさぞかし気持ちいいこと請け合ひの水流が移動していた黒フードへと直行。今度は見事に命中した。まあ、水しぶきが相手に直撃してもさほど威力は無いだろうがね。

「おい、花壇に水をやるならわかるが……。」

「零時、あんたは黙つててつていつたじやない……。」

あ～、酷いや。うん、なんて酷い人なんだ？ふ、さすがの俺の心もナイフですたずたにされた拳句、唐辛子とマスターをつけられた気分だ。じゃ、実況のほうにお仕事回りますかね。

おつと、相手は先程よりもセレネに近づいたぞ。

「これならつ……。」

それを真っ向から迎え撃とうとするセレネ。今度は腕から電撃ですか。全く、人間びっくりショーツて奴ですね。ウエイトレスやら

無いでそつちやつたほうがいいと思いますが？ああつと、放たれた電撃は壊れていた電球にヒット！一瞬だけぴかってなりましたが、お陀仏ですね。

「くそーーー！」

さて、そろそろチェックメイトってところですね。あ、ここにきてようやく相手が紐っぽいものを取り出しました。鞭ほど太くないみたいですし、これは高速用なのではないかと思います。

「・・・・・。」

「 もやあーーー！」

可愛くいったつもりでしうが、駄目なもんはダメですね。うん、相手はセレネをまるで赤子の手をひねるかのようにゲッチョしてしまいましたね。あ、近くの電柱に吊るされましたね。

「 零時ー早く逃げてーーー！」

逃げるへビーに？俺の視界に入つてくる相手は既にいろんなところを壊しちやつたりしているから、逃げ道なんて無いぞ？いや、ピンチだな。

「 おい、 にげれねえぞ？」

「 なんでもいいから、 はやくつーーー！」

なんて勝手な奴なんだ！！だんだんとこっちに相手が来ているのが目に見えるが、いやあ、一般人の俺には何も出来ないね。ははつ、

「どうしたらいいだろ？」

「なあ、魔法使いなら何か出来るんじゃないのか？」

「・・・まず、田とか閉じなくていいから集中して！―自分の思い描いたものを実態させるように！―それが基本で全てよ！―はい、私は魔法の全てを今貴方に伝授したわ！―」

おいおい、それで本当に魔法を習得したって奴なのか？

「・・・・。」

「一・零時、逃げて！―」

相手が腕振り上げたときに逃げるついわれたつてどうに逃げるんだろうか？とりあえず俺は俺なりに魔法という奴を使ってみることにした。ええとだな、集中して見て、思いを具現化させる？はつ、なら・・・・・じんなのどうだ？

「・・・・。」

俺が思つたとおりのものが姿を現した。それは見事、相手を捕らえた。え、何を出したのかつて？とりあえず相手を押さえつけたほうがよさそうだったので、地面からとあるロボットの腕を出してみたのさ。ふふつ、他にも色々思いつくことが出来るぜ？ロボットの手でくすぐつたり、テレビを出して相手を笑わせたりな。

俺はもはや暴走状態といつても過言ではなかつただろ？手に入れた力をおもちゃのようにして使つていつた。公園の中の遊具は全て姿を消し、塀もなくなり、公衆用のトイレも姿を消した。残ったのは電柱に縛られているセレネと俺、そして色々やって笑わせて気

絶させた相手だけだ。誰も、口を開けいつとしない。  
まず口を開けたのはセレネだった。

「れ、零時、貴方・・・何者なの？」

「何言つてんだ？俺は不幸にもお前に魔法使いにされた一般人だ。」

本当に氣絶したのか魔法の力によつて作り出された木の棒で相手  
をつついてみる。

「・・・ん。」

「あ・・・。」

「零時、気をつけよ！――」

首を上げたときに相手のつけていた黒のフードが後ろへと取れて  
顔が見える。

「あーっ！――」

いきなりセレネが大きな声を出し、俺を驚かせた。いやあ、あの  
声をここまで大きくしたら『近所さんに迷惑ではないんだろうか？  
ほら、見たことか・・近くの犬が『うっせんじや！――ぼけが！――』  
つていつてるじゃねえか。

俺が抗議の声を上げようとすると、目の前の黒フードが俺に話し  
かけてきた。おや、何処かで見たような顔だな？

「・・あの、剣山さんですよね？ほら、ファミレスで間違つて魔法  
使いにされたつて噂になつてますよ。」

「貴女は・・・？」

「これは失礼しましたとチロコと舌を出して答えた。

「ソル・プロミニネンスと申します。以後お見知りおきを剣山さん。

そういうて今度はセレネのほうを見始めた。

「まあ、今日昨日じゃ腕は上がらないのね？基本的な技しか未だに使えていないなんて、それで貴女はどうやって剣山さんに魔法を教えるの？もしも、もしもだけど・・・私が本当に『古代魔法振興会』の一人だったらどうしてたの？そんなことじや、あつという間にありますいよ。」

何を言つて居るのか俺にはさっぱりだが、どうやら、セレネが怒られて居るようだ。まあ、いわゆる仕事を失敗した部下を怒っている上司といった感じだろうか？

「・・・で、でも・・・ソルさんだって零時に負けちゃったじやないですか！！」

何がでもなのが知らないが、セレネの性格上、反抗したいのだろう。それに対して相手は溜息を漏らした。

「戦闘中に魔法の方法を教えてたけど、あれが他の人だったらもっと詳しく教えてたはずよ？剣山さんが理解できたから良かったけど、貴女じや無理じやないの？それに、剣山さんと一度、手合させしたら分かるわ。剣山さん、悪いけどあの子の束縛を解いてあげる？」

「え、ええ・・・。」

拒否していたら話が進まないだろうから、話から置き去り気味の俺はセレネを拘束していた紐を取った。紐は瞬時に消え、ちょっとだけ俺を驚かせた。

「どうましたよ?」

「よし、それなら・・・はじめましょうか?剣山さん、今から貴方の師匠はセレネじゃなくて、私。以後、何を言われても必ずこうことを聞くことわかった?」

「・・・はあ?わかりました。」

「じゃ、零時君・・・このわからずやと戦つて。その子もどうやらせよ貴方と戦うために広いこの公園に来たんでしょうから・・・自分の考えが間違つてたことに気がつくわ。」

頭に疑問符かかげる俺に田の前に立つているセレネも頷いた。

「そうね、簡単に言うなら力試しみたいなものかな?どのくらいの素質があるとか、どこまで使えるのか・・・井、そんな感じの試験だよ。」

「や、そつなのか?」

「大丈夫、手加減はするから・・・」

「の弦をソル師匠は聞いていたのひつ。くわっとその目を開けて、セレネに攻め口調で言つたものだ。」

「セレネ！ 本気でいかないと貴女、大変なことになるわよ。」

「わ、わかりました。」

「うん、今度なんでこんなにソル師匠とやらがセレネに対して厳しいのか教えてもらおう。ああ、早く帰つてねてえよ。」

五、

セレネと対峙し、俺は先程の戦いを頭に浮かべる。そして、ソル師匠に対してやつたように相手の動きをまづは捕らえることにした。

「・・・えー！」

なんと、一発でセレネを捕らえたことが出来た。さて、これで終わりなのか？

「終了、零時君が攻撃しても構わないけど、したら確実にセレネは昇天するでしょうね。どう、自分がどんな人物の師匠になるのか分かつてた？」

「え・・・う、嘘・・何で避けることができないの・・？」

茫然自失といった感じでセレネはソル師匠の顔を見ている。やれやれといった感じのソル師匠は今度はぼそつとたつてている俺に話しかけてきた。

「零時君、君は既にどんな魔法でも思いつくままに使うことが出来る。古代魔法だって使えるし、禁じ手だって使える。この意味が分かるかな？」

「どうこいつ意味かよくわかりませんが？」

「君は魔法使いの敵でもあるのだ。」

「話が分かりません。」

「さうか・・・今のところ、魔法使いは平和を愛している。まあ、もともと・・・魔法には種類があつて、一つが発動させたものを操作しないといけないものが現代魔法で、君は複数魔法が使える古代魔法って物が使えるんだ。古代魔法は危険なため、使用が禁止されている。」

よくわからんな。それのどこが魔法使いの敵になるんだろうか？

「つまり、そんなことを魔法にしてしまえば争いが起こりやすくなる。世界を征服するのも簡単だし、そんなことになつたら平和をしていくといつて、魔術使いたちは黙つてはいけない・・・。」

成程、それはそれでかなり巻き込まれ氣味の迷惑だな。まさか、コップいっぱいの水がここまで俺の人生を狂わせるなんて・・・。

「で、俺はどうなるんですか？まさか、今ここで仕留められるとかあつませんよね？」

その質問にソル師匠は苦しそうに答えた。

「うむ、実際のところはそうなのだが・・・。」

わああ、俺、命狙われてる？

「だが、残念なことに君に倒されてしまった私がどうこう言つ」と  
じゃないな。うん、そうだな……私はこれからどうにかして君を  
助けたいと思うし、一見するとさえない男だが、君にも未来つても  
のがあるだろ？それに、意外といいやつみたいだからな。ただ  
し、たまに私は零時君のもとにやつてくるからな。そのつど、試験  
はするから、くれぐれも世界を滅ぼそつとなんて考へないでくれよ。

「

そういうて消えてしまつた。残つたのは公園の残骸と未だに茫然  
自失のセレネだけだ。

「おーい、セレネ？」

「……。」

「セレネ、そろそろ帰つたほうがいいと思うぞ？公園は更地になつ  
てしまつたんだし、かえつて寝ないと俺は明日から学校なんだから  
さ？もしもーし？」

「嘘よ……あれだけがんばつて……がんばつて練習したのに……  
・・初心者に負けるなんて……」

「おいおい、今度は泣き出しちまつたよ。何、俺の所為？これって  
俺の所為ですか？」

「泣くなよ……。」

「あんた……なんかに……負けるなんてえ……だって、私は、  
私は……師匠から『きちんと教えておくんだぞ！』零時君がどの  
ようになるのかはお前しだいだからな』って言われたのよ？これじ

や、教える意味ないじゃない！…力の加減だつて完璧！…逆に教えて欲しいぐらいだわ！！

「そ、そんなこと無いぞ。セレネがいなかつたら今頃、大変なことになつていたと思うし、お前だつてがんばつたんだろ？それに、まだほとんど何も俺としては教えてもらつてない気がするんだが…。？」

何で俺が慰めないといけないんだ？俺、何か悪いことしたのか？

「ええと、俺にはお前が必要なんだ（多分）お前が泣いていたら俺が（周りから泣かしたと言われて）とつても困る。それにお前は（泣いているより）笑つていいほつがいい。ここ数時間だつたが、お前の表情の中で俺が一番好きな顔はお前の笑つている顔だ。だからさ、お願いだから笑つてくれないか？お前が…・セレネが笑つてくれるなら、俺は何でもするから…・・・。」

おいおい、ここまでいつてやつたんだからそろそろ泣き止んでくれないか？早く泣き止んでくれないと俺の良心が痛みに痛んで、真っ白になつちまう。

俺を見上げるセレネの顔はプライドとやらをはずたずたにされたような奴の表情であった。目が死んでいる…・いや、死んだ魚のような目だ？どつちだ？それとも意味は一緒か？

「ほ・・ん・と?」

かすれた声でそんなことをセレネは俺に聞いてきた。

「何がだ？」

「私が・・・私が巻き込んだ上に、勝手に敵扱いされても？」

「終わったことだ。終わったことは変えられない・・・いや、変えちまつたら今の俺は存在しないからな。」

少しだけ、セレネの顔に生気が帰ってきた。さて、もうちょっとと帰つてきてもらうかな？ そろそろ、門限つて奴があるだろ？

「じゃ、本当に私が必要なの？ 今のところ、まだ勉強も足りてないし、実践も既に零時のほうが上・・・本当にやんな師匠が必要なの？」

いや、それは・・・どうだろ？ だが、ここまでは言つたんだから言わないといけないんだろうな。

「ああ、俺にはお前が必要なんだろ？ 現に、俺はお前が悲しんでいればこいつやって色々と気を使わねばならない。まあ、これが運命つて言つのなら、じょうがないんじゃないか？」

「え？ 私だったらそんな運命はイヤだけど・・・」

俺もいやだね。まさか、まさか・・・レストランに行つただけで講までなつてしまつとはどれだけ俺の運命はひねくれてんだといいたいな。俺としては異世界に行って謎のロボット操るエースパイロットにでもなりたかったんだがな。

「それにだな、魔法使いといつても、普段はそう、大差ないんだろ？ 普段魔法を使えなくしてしまえば、俺は一般人のままだ。だから、その問題も解決したつてことだ。」

「じゃ、魔法使いに狙われてる問題は？」

「う、それが一番厄介な問題なんだろ？ ソル師匠がどうにかするつて感じだつたけど、あの人信用していいのか？ 先程、会つたばかりの人間だ。本当に信用していいのか分からないうが、あの人があ言つていたことを思い出す。

「ま・・・ それは簡単だ。俺がそんなことを考えなればいいんだ。つまり、俺が平和ボケしどきや問題は無い。」

「そんなもんなの？」

「やうだ。お前が心配することは無い。お前は单なる俺の魔法使いの師匠。それ以外は無い。俺を魔法使いに仕立て上げたドジなウエイトレスじゃないさ。む、早いところ帰らないと母さんが心配してるだろよ。いや、勘違いられるからひさと帰りや。」

言つて恥ずかしくなつてきたので俺はセレネの手を引いた。

「零時・・・」

「何だ？」

「ありがとね・・・。」

完璧に元気が出たからいいだろ？ ま、これから変なことがあるだろ？ が、俺は俺だ。いや、何か襲つてきた場合はセレネが何とかしてくれるに違いない。いや、何とかしてもらわないと困るな。

「なあ、『古代魔法振興会』ってなんだ？」

「それはね、メンバー全員が黒いフードを頭からかぶつてて、魔法使いの一族から除外され、組織的に・・・古代魔法を使って何かをやらかしたい人々の事よ。全員が全員、かなりの実力者って聞いたことがあるわ。」

ふうん？俺もかなり変な場所に足を踏み入れた・・・いや、引きずり込まれたものだな。

「零時・・・。」

突如、声色が変わったセレネに名前を呼ばれ、俺はちょっと戸惑つた。

「何だ？」

「以外と手、暖かいね？」

そういわれたので俺は手を離した。

「な、何で手を離すの？」

「ふん、たまたまだ。ちょっと焼きが回つてお前の手を握っちゃつただけだ！！それに俺は冷たい手を握りたいの！！機械っぽいのが好きなの！人間よりもねじのほうに興味があるんだ！！」

「ちょ、恥ずかしがらなくてもいいじゃない？同じ屋根の下に住むんだからさ？」

「け、一人で言つてろ！俺は・・・。」

笑っているセレネの顔を見たらまあ、しおうがないかもしれないと思つてきた。はあ、全く・・・どうしたもんかね？

「セレネ、俺は・・・別にお前を慰めたわけじゃないぞ？それに、お前が心配そうな顔してたから手を握ったんじゃなくて、俺の心が不安定になるだけだつたから手を握っただけだ！！つまり、俺は自分でためにこうしただけだ！！」

「それって、慰めてくれたってことじやないの？」

「違う！…俺は・・・別にお前のために言つたわけじゃないの…！」

「…ヤーヤしながら聞いてくるセレネはなんだか嬉しそうだ。へ、へん！…俺はお前の笑顔を見たら、嬉しくなるだけだつたから笑顔にしただけに過ぎない…まあ、お前が笑顔じやない顔になつたら俺が笑顔にするだけさ。最も、俺が間違えてお前を怒らせてしまつたときは勘弁してもらいたいが…。

(後書き)

さて、まだまだ素人の雨月も十作品目となりました。まあ、何か悪いところがあればなんばん教えてください。努力してみたいと思います。できれば、ここがいいなどといつてくれるとうれしいのですが。。。予告ですが、今度の作品はちょっと複数の作品を混ぜたような感じになるかもしません。わかる人にはわかる、『罪人天使』です。この作品はまあ、またはじめはすべて同じですね。おっと、無駄話ですね、すみません。さて、この作品はもともと、連載の予定でしたが、ちょっとどうかなと思つたので短編として紹介させてもらいました。一人でも連載用にしたほうがいいのではないかと感想をくれたらがんばって新たに書きたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5817b/>

ご注文は？～魔法使いで！～

2011年1月16日14時46分発行